

もしサイタマの夢が正夢だったら

怪人C

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

一部だけ難易度ルナティックと化した世界で、ヒーロー達は戦う。

目次

もしサイタマの夢が正夢だったら	1
危機の実感	5
S級への試練	10
S級集結	15
海人族襲来	20
予言の日	25
S級達の意地	29
最強のヒーロー	35

もしサイタマの夢が正夢だったら

明け方、陽光がビルを照らし小鳥がチュンチュンと鳴く。

サイタマは寝ぼけ、鼻提灯を作りながらうとうとしていた。三年前にカニランテを倒し、趣味でヒーロー活動を始め過酷な修行を経て強くなったサイタマは心が満たされない日々を送っていた。どんな怪人と戦ってもワンパンで倒してしまうのに、怪人の攻撃はサイタマの体に傷一つつけることができない。

だからサイタマは、最早怪人との戦闘で高揚感を覚えることはなかった。

はつきりサイタマが目を覚めたのは、Z市の天地を揺るがすような轟音が切っ掛けだった。意識が覚醒すると共に壁から黒い巨大な手が出てきてサイタマの頭をすっぽり包み込む。

思わず襲撃者の腕に殴りかかったサイタマだが、なんとパンチは強靱な肉体に跳ね返され、サイタマはカウンターの襲撃者の拳によつて吹き飛ばされていく。

吹き飛んだサイタマの体は部屋のTVを巻き込み、部屋の壁すらも破壊して屋外のコンクリートの地面に叩きつけられた。威力で全身が幾度となく地面をバウンドするも、サイタマは右足をブレーキ代わりにしてなんとか勢いを殺した。

「お、俺んちが……」

コンクリートの地面にはサイタマが踏ん張った跡がくつきりと残っている。

サイタマの額からは大量の血が流れ出ていた。

ワンパンで怪人を倒せなかったのも、サイタマが血を流すのも久しぶりのことだった。

襲撃者がコンクリートの地面を割るようにして襲い掛かり、サイタマは再び頭を包み込めるサイズの剛腕で殴られる。右腕で咄嗟に防御するも、勢いを殺しきれずサイタマは再び宙を舞うこととなった。

「強い……なんなんだ、お前らは」

サイタマは愚直な疑問を口にするこしかできなかつた。襲撃者

は一匹ではなく、地面に穴を明けて何匹も這い出てくる。巨大な黒い土くれの人型の怪人達が、サイタマを取り囲む。その数、おおよそ数十体といった所だろう。

俺が持つ圧倒的な力はつまらない。

ここ最近ずっと考えていたことだ。

サイタマはヒーローとして活動しながらも無意識に自分と互角に戦える強い怪人の存在を追い求めていた。

そのサイタマの密かな願望は、今日叶おうとしていた。

土くれの怪人が、サイタマの疑問に答える。表情は分からないものの、サイタマからはかえってそれが一層不気味に感じられた。

「なんだとは失礼だな、我々は真の地球人だ。最も貴様らは私達を地底人と呼んでいるそうだがな。地上人を全滅させ、我々がこの世界を掌握する。他の種族が動き出す前にな。そのためにまずゴーストウンの化け物と噂された、障害となる貴様を真っ先に倒す」

「人間きが悪いこと言うじゃねーか、つーかお前らのほうがよっぽど化け物だからな？」

サイタマは怪人達に軽口を叩きながらも、高揚感を抑えきれない。この地底人、間違いなく今までの怪人の中で一番強い者達だ。出し惜しみをする余裕などない、全力を尽くして戦わなければならない。

サイタマはしゃがみ込むと、コンクリートの地面に手をかけた。

『必殺マジシリーズ……マジちゃぶ台返し』

サイタマの呟きと同時に、周辺の地盤が大きくひっくり返りサイタマを取り囲んでいた地底人達は空中へ投げ出された。

瓦礫の山が地底人たちの視界を覆い尽くし、平衡感覚すらも逆さまになる。

サイタマの判断は単純明快だった。敵が混乱している今のうちに数を減らす！

『必殺マジシリーズ……マジ走り』

サイタマの周辺で空気が破裂するような音が響く。光速を超えた音であった。

サイタマの走りは、手を抜いている時ですら現在地球上で最速と思

われている閃光のフラッシュをも凌駕する。その本気の速度を視認できる怪人は今まで存在しなかった。

サイタマは空中にいる地底人たちを拳で各個撃破していった。もがいている地底人達に連続パンチを浴びせ一体、また一体と葬っていく。

だが地底人達も一体一体が推定災害レベル竜以上……もしくは神に匹敵する存在。

周辺の仲間がやられていくうちにサイタマの走力すら見切り、そのうちの一体が走ってくるサイタマに蹴りを入れて弾き返す。凄まじい威力で蹴られたサイタマは雲を突き抜け、成層圏も突き抜けてなんと宇宙にすら到達した。勿論全身の服がビリビリと破れ、サイタマは全裸になっていく。

「これは流石にやべえ、息止めよ」

月も通り越し、もう少して引力から離れサイタマは永遠に宇宙を彷徨うはめになるところだったがオナラを逆噴射してなんとか地球へと舞い戻る。

地上では地底人達が勝利の勝鬨を上げており、サイタマはその一体を踏み潰す。

着地した瞬間、震度六程の大きな地震がZ市内を大きく揺らした。

「よし、犠牲は大きかったがこれで地上は我らのものだ……ひぎや」

情けない声とともに踏み潰された怪人に構わず、サイタマは残り僅かとなった地底人達にむけて大声をあげた。

「そうはさせねえ！地上は俺が守る！」

『必殺……マジ殴り！』

決死の覚悟と共にサイタマの突き出した拳の拳圧はZ市郊外だけではなく、市内全ての建物を揺るがしていく。サイタマの全力の一撃は巨大な砲撃のように残った地底人達を飲み込んでいった。

地底人の全滅を確認したサイタマは仰向けに倒れ、荒い息を吐く。

久しぶりの血沸き肉踊る、命を懸けた全力全開の戦いで、漸くサイタマは自分の隠された願望を悟った。

そうか、これが！これこそが！俺の求めていたものだったのか！

地底人との戦いによつて全身のあちこちから血を流しながらも、とても充実した様子のサイタマ。そんなサイタマに怒りを向ける存在があつた。地の奥底から鳴り響くような声が轟く。

「息子たちが随分と世話になつたようだね……」

サイタマは戦慄を抑えきれなかつた。この強大な地底人達が、単なる子供でしかないというのである！

慌てて起き上がったサイタマの背後から現れたのは、三メートルはあるだろう巨大な真つ黒の土偶のような怪人だつた。全身が高エネルギーで包まれており、左右対称の四本の太い腕がそれぞれ高熱の剣をサイタマに向け構えている。

「正直私自らが出るまでもないと思つていたのだが、この地底王が相手をしてやる！地上は我のものだ！」

「お前が親玉か！地上の平穏は絶対渡さねえ！」

あれだけの死闘が始まりに過ぎなかつたことを悟つたサイタマはむしろ覚悟を決め、まだ強敵と戦えることに喜びを隠しきれないまま地底王に飛び掛かつていく。

サイタマはようやく待ち望んでいた、強敵との死闘を手に入れた。しかしこの戦いは、まだほんの序章に過ぎなかつた。

この地底王と肩を並べることができる、同格の怪人が三体存在する。

深海王、天空王、森林王……災害レベル『神』の怪人とその配下達はそれぞれの縄張りに潜みながら人類に代わつて地球を支配する機会を静かに窺つていた。

ヒーロー協会や襲来する宇宙人、怪人協会をも巻き込んだ地球存亡をかけた危機はまだまだ続くのであつた。

危機の実感

「先生、おはようございます!」

「アンタに慕われる理由なんかないんだけど? さっさと出てってこない?」

「俺は先生のようになりたいです!」

「フブキじゃあるまいし、私には部下は必要ないわ」

朝っぱらからS級2位、戦慄のタツマキに大声で挨拶をしているのはサイボーグのジェノスである。Z市で観測された超高エネルギー反応にタツマキが興味を示し縄張りをZ市に移動させた所、ジェノスが蚊の大軍を束ねるモスキート娘と戦闘、自爆寸前であるところをタツマキが目撃、モスキート娘を瞬殺したのがこの両者の関係の切っ掛けであった。その結果タツマキの圧倒的な力を目の当たりにしたジェノスはタツマキの実力になんか近づくために、師匠と呼び慕っている。

タツマキはシッシ、と手を振ってジェノスを追い払う仕草をする。

「そもそも私は超能力者、アンタはサイボーグでしょ? 私に憧れても無駄でしかないわ。諦めなさい」

「俺は狂サイボーグに立ち向かえる力をつけるために先生のように強くならねばならないのです。先生に救って下さったこの命を無駄にしないためにも!」

「アンタ暑苦しいわね……私こういう男嫌いなんだけど」

タツマキは頭を抱え、どうやってジェノスを追い払おうか迷う。もう超能力で無理やり追い出してしまうてもいいかもしれない。ジェノスのように、タツマキの圧倒的な実力に心酔する人間は少なくともいない。

しかしタツマキにとっては、単に煩わしいだけである。

ヒーローが人助けをし、怪人を倒すのはタツマキにとっては当然のことであり、日常であるからだ。

ジェノスのタツマキへの盲信はストーカーに近い。タツマキにとっては邪魔でしかないが実力行使も忍びない。どうしたものか。

「ハア……強くなりたいのなら取り敢えず、私から離れてヒーローでも目指しておけば？あの蚊との戦い見た限り、アンタならいい線行くんじゃない？S級になったら相手してあげてもいいわ」

「……分かりました！」

タツマキの提案を聞き、早速ヒーロー協会へと試験を受けに走るジェノス。

ジェノスを暫く追い払うために適当に口にした、タツマキのこのアイデアが結果的にジェノスを本当にS級ヒーローへと誘うこととなるのだが……。

「これで暫く平和になりそうね」

他人の実力を正確に把握していないタツマキは、弱いジェノスがすぐにS級ヒーローになれるとは微塵も思っていなかった。自身の安息がほんの僅かであることにタツマキは気付いていない。

「いてて……」

その一方、地底王との戦いで全身を骨折したサイタマはA市のヒーロー協会付近の病院で治療を受け、ベッドに体を横たえて痛みを堪えていた。思い返すのは地底王との凄まじい激闘。結局両者痛み分けで決着はつかず、地底王は地の底へと再び戻っていった。

「あれと同じ強さの怪人が、三体も居るのかよ……洒落になつてねー」

サイタマは地底王が去り際に言い残した捨て台詞を思い出す。

まだ地上の危機は過ぎ去っていない上に、地底王と同格の怪人が三体。

サイタマは再び気分が高揚するのを抑えきれなかった。

世の中は広い。自分と互角に戦える怪人はまだまだ存在する。

「怪我が治ったらトレーニングを再開しないとな」

腕立て伏せ100回、上体起こし100回、スクワット100回、ランニング10km。

サイタマがこれまで毎日行っていた鍛錬をもう一度しっかりしようとして心を決めた、その時だった。病室のドアを開けて、大きな人型の銀色の機械が入ってきた。

背中に複数の突起物があり、実にメカメカしい。

「なんだお前、こっつてロボットも治療してもらえるのか？」

「ソクナワケハナイ。ワタシハヒーロー。S級7位ノメタルナイトダ」

「お前も趣味でヒーロー活動をしているのか、仲間だな！……S級つて何だ？」

「一緒ニスルナ。オレハ協会カラミトメラレタプロヒーローダ……」

メタルナイトはヒーロー協会の存在すらも知らない無知なサイタマに呆れていた。その結果片言ながらもメタルナイトはサイタマに説明する羽目となる。

メタルナイトが病院に訪れた理由は単純であった。Z市で観測されたエネルギーの正体の一人、怪人と戦っていたのがこのサイタマであるとカメラ越しに確認できたからだ。メタルナイトの超科学力……超スローモーションカメラを使っても追いきれない程の凄まじい速度で怪人とこのハゲが戦っていたのは間違いない。

S級を超えかねない力をサイタマが持っているのはメタルナイトからしても明らかであり、強大な戦闘能力を持ったサイタマに興味を持ったのである。

一見ただのハゲにしか見えないサイタマだが、この細身のどこに凄まじいパワーを秘めているのか……？メタルナイトは自身の好奇心を満たそうとしていた。

「ソレデ、ケガハナオツタヨウダナ？」

「ああ、ヒーロー協会？つてのは分かったけど今日は土曜だからスパーの特売日だし、早く帰って鍋の準備しねーといけねえんだよ」

「肉クライ、後、デイクラデモ買ッテヤル」

「よし、話を聞こうじゃねーか」

何とも現金な、てのひら返しがい早いサイタマに機械越しに再び頭痛を覚えながらも、メタルナイトはある提案をした。

「オマエニハ私ノ実験ニ付き合ッテモラウ」

「いいけど……周りの患者やナースすげービビってるから、もうこの格好で病院には来るなよ」

周辺は大パニックだった。機械の大きな体で病室に訪れれば、そりやそうなる。

数時間後、サイタマとメタルナイトが立っていたのは周辺に何も無い岩場だった。ここならメタルナイトの本領である、周辺を焼き払うような高威力の攻撃も使えるだろう。メタルナイトは岩場周辺に大きなカメラを複数設置し、サイタマの詳細な戦闘データを取ろうとしていた。

「実験開始ダ……！」

サイタマに向けてメタルナイトの背中から凄まじい量のミサイルが放たれ、大きく爆発する。

噴煙の中から現れたサイタマは、無傷だった。

その次にサイタマの元に差し向けられたのは、全身に拳が生えたような近接戦用のロボ。1秒間に数十発はあるであろう打撃に対してサイタマは肩を竦めるだけだった。

「おもしろーオモチャだな」

メタルナイトはロボと戦うサイタマの動きをカメラ越しで見ている。戦慄した。

「ナンテ無駄な動きキナダ……ソレナノニ、余裕スラアル」

「普通のパンチ」

近接戦闘でどうすることもできず、災害レベル鬼上位に通用するであろうロボは一瞬で破壊された。サイタマは汗一つかかず、平然とした表情をしている。

カメラで分析を行った結果、この時点でメタルナイトはサイタマの脅威を災害レベル竜並だと見抜いた。このまま機械を差し向け続けると無駄になるだけだと悟ったメタルナイトは、それでもサイタマの全力を知りたいがために実験をする。

その結果を後悔するとも知らないで。

「もういいか？」

「ツギデオワリダ。コノ周辺ニワ何モナイ。本気デ空中を殴ッテミロ」

「それで肉が手に入るならいいか。必殺マジシリーズ……マジ殴り

！」

サイタマの繰り出した単なる拳の衝撃は遠くのヒーロー協会すらも揺るがせ、凄まじいエネルギーとなって空中を突き進み、宇宙に到達。丁度乙市に向かっていた、観測される前の巨大な隕石をあっけなく破壊した。

ビリビリとした衝撃を観測し、設置した観測用のメタルナイトの機械が衝撃で次々と破壊されていく。カメラ越しのボフォイは啞然としていた。

「これと直角の怪人が四体居るなどと、シババワの予言を待つまでもなく地球がヤバいのではないか」

タツマキやブラストでも、サイタマに勝てるのか怪しいとボフォイは悟る。

タツマキのデータは入手しているが、サイタマとは観測できるエネルギーが違いすぎる。圧倒的、それほどまでに思える程の桁外れの力。

誰よりも分析が得意なメタルナイトだからこそ、察せてしまう地球の危機。

メタルナイトは、茫然としながらサイタマを引き込みざるを得なかった。

「オマエ、S級二ナレ。危機二スグニウゴケルヨウニスル必要ガアル」

「まあ一応試験は受けてみるけど、ちゃんと肉奢れよ」

「ワカツテイル！」

元々災害レベル鬼すらも倒せる隔離枠としての側面もあるのがS級。データがあればヒーロー協会も納得せざるを得ないだろう。地球の危機に能天気なサイタマと、そんなサイタマに苛立つメタルナイト。

これがどこか凸凹とした両者のコンビの始まりであった。

S級への試練

「おつすメタルナイト……何でお前倒れてるんだ？」

「オマエヲS級ニ上ゲルノニ苦勞シタカラダ……」

「機械の体で休む意味なくね？」

サイタマがヒーロー試験を受けてから数日後の乙市郊外、サイタマの自宅でメタルナイトとサイタマは同居していた。相変わらずメタルナイトは生身の姿をサイタマに晒さないままであり、サイタマはそれによってメタルナイトが機械人間と勘違いしていた。

メタルナイトはむっくり起き上がると、座布団に座った。

機械とハゲが座って話をしている姿は中々にシニールな光景である。

「精神テキナモノダ。ホンライハC級開始ダツタゾサイタマ」

「ピンとこねーけど、助かったのか？」

「C級下位ハ民衆ニイッパンジン程度ト認識サレテモオカシクナイ」

「うげ、それは嫌だな……ありがとな」

実際にサイタマがS級18位となれたのは、事前にメタルナイトがヒーロー協会に詳細なサイタマの戦闘データを送っていたのが一番の理由である。ヒーロー協会においてはメタルナイトの科学力と分析力は危険視される程のものであり、サイタマの強大な力を考えてS級に推薦したメタルナイトの発言は無視できるものではなかった。最終的な決め手となったのは、サイタマのマジ殴りが偶然地球に迫る隕石を破壊したことだろう。データと実績がうまい具合に噛み合い、童帝やアマイマスクなどもサイタマの圧倒的な力を認めざるを得なかった。

「礼ヲ言ウ必要ハナイ。地球ノ危機ダ、オマエガS級デナイトオレガ困ル」

メタルナイトが他人のサイタマをわざわざ推薦した理由はこれだった。S級でないとS級のみを集めるような特別なヒーロー協会の緊急招集に呼ばれることがなく、特化した戦力として作戦に組み込まれることがなくなる。サイタマのようなイレギュラーが最前線の

戦況を把握しないまま、戦場に突っ込むのはマズいだろう。

最悪立てた作戦が全て水の泡となる可能性がある。

「お前機械だけどいい奴だな！」

「……勘違いシテイルヨウダガ、チャントロボヲ操ツテイル生身の肉体ハアルカラナ？」

「じゃあ今度一緒に鍋食おうぜ。今度は俺が金出すからさ！」

「ゴトワル。俺ハ俺ノ目的ガアツテオマエノ傍ニ居ル。慣レ合ウ気ハナイ」

実際メタルナイトの保有している財産なら自腹で高級料理など、いくらでも食べることが出来る。サイタマの傍に居るのは、単にその強さの秘密を探るためにすぎない。

そう思いつつも間近でサイタマの力を目にしたメタルナイトの心中は徐々に変化し始めていた。本来サイタマの監視にわざわざロボを差し向ける必要はないはずという事実には、天才のメタルナイトが気付いていないのがその証拠である。

そんな二人の団らん中にピンポンという来客を告げる音が流れる。

「俺が出るけど、お前は出てくるなよ？」

「ワカツテイル」

サイタマはメタルナイトに釘を刺して玄関に向かった。

メタルナイトが機械の体で対応すれば、再びパニックになるであろうことは容易に想像できる。

サイタマはドアを開ける。来訪者は、青い髪的美男子だった。

「S級18位、サイタマだな？僕はアマイマスク。キミがS級に相応しいかどうかため」

サイタマはアマイマスクの言葉を遮り無言でドアを閉め、居間へと戻っていった。

「ヨカッタノカ？」

「いや、何か面倒そうだったから」

「ソウカ」

「今日の晩御飯、何にすつかな」

再びピンポンピンポーン、と二回インターホンが鳴る。

サイタマは玄関に向かい、面倒そうな表情で再びドアを開けた。

「いいか僕を怒らせるな。次に同じことをしたら、ドアを蹴破るからな」

「そうになったらちゃんと弁償しろよ」

アマイマスクは、無視をしてポーっとしたサイタマの全身を頭から爪先までじっくり観察する。暫しの時間の後に大きく息を吐いた。

「やはり、僕にはキミが隕石を破壊したとは信じられないな。僕は芸能界に所属しているから分かる。キミからはオーラというものが感じられない。高くてB級が相応しいだろう。ギリギリC級に受かったようなカスにはそれでも高いぐらいだ」

「俺も後から隕石のこと知ったし、実感ないけどな」
「……」

ピキピキと額に青筋を立てるアマイマスクと、どこかずれた返事をするサイタマの膠着した状況に割り込んだのは、サイタマの後ろから噴き出す蒸気と共に出てきたメタルナイトだった。

「あ、でてくんなよメタルナイト」

「文句ガアルノナラ、オマエガ戦工。元ヨリソノタメニキタノダロウ？」

「……話が早いじゃないか。僕直々にサイタマ、キミを肅正してやる」
「面倒なんだけど」

「相手ヲシテヤレ。本当ニランクヲ落サレルゾ」

メタルナイトに振り返って助けを求めるサイタマだが、メタルナイトは擁護するつもりはない。元々アマイマスクはヒーローの昇格に関与する権利を持っている。

メタルナイトのコネがあるとはいえ、こうなるのは必然といえた。一方のサイタマもあまりランクに興味がないとはいえ、落とされるのは何となく癪に触ったことは確か。それにもう一つサイタマには勝負を受ける大きな理由がある。

「メタルナイトが折角倒れるぐらい頑張ってくれたんだ。俺も体はら

ねーとな」

「腹を括ったようだな。じゃあ移動するぞ」

「ああ」

周辺に何も無い空地に移動したサイタマとアマイマスク。

こつそりメタルナイトがあちこちに小型の監視カメラを設置していた。

「勝負はどちらかが有効打を当てるまでだ、いくぞグツハアアア！」

張りきったサイタマは、試合開始の合図とともにアマイマスクに近づいて殴って瞬殺した。

「いけね、やりすぎちまった。大丈夫か？」

「僕は見誤っていたのか、これが圧倒的な強さという華！S級に相應しい……ガクッ」

「……よくわかんねーけど、大丈夫そうだな！」

欠けた肉体が再生していきながら、何やらぶつぶつ呟いて気絶したアマイマスクにほっと安堵するサイタマを画面の向こうでボフォイは監視していた。

「これでサイタマのS級は確定だろう。後はこれからの危機をどうするか考える必要があるな」

シババワの新たな予言は『海がヤバイ』というものであった。

おそらくS級が全員招集され、海に隣接しているJ市に関して何らかの対策が取られるだろう。そこでジェノスとサイタマを含めた17人が一斉に顔を合わせる事となる。

「サイタマに突つかかるヒーローもいるだろうが、うまくオレがフォローする他あるまい」

ボフォイには大きな野望がある。しかしその前に地球が減んでは意味がない。

サイタマが言う、互角の四体の怪人と手下を倒すまでは暫くはサイタマとは友好的な関係でいるべきだろう。

「せいぜい利用させてもらうぞサイタマ」

黒幕のようにやけるボフォイだったが、ちゃっかりアマイマスクがやられる姿も録画しておりフォローは完璧。サイタマからは普通

に良い人に見えていない。

その翌日ボフォイの予想通りS級が全員集合、童帝が指揮を取ることとなる。

間もなく海人族が現れるまで、後2日。

S級集結

「おー、でっけー建物だな」

A市の中央で、周辺の建物より際立って大きい本部ビルを見上げたサイタマが能天気に関心する。サイタマとメタルナイト達S級はシババワの予言を深刻に捉えた重役達によってヒーロー協会本部に緊急招集されていた。

「ドウダ立派ダロウ。ヒーロー協会本部ノコノ要塞ビルハ、俺ガ作ツタモノダ」

「……メタルナイトって実は結構凄い奴だったりするののか？」

「今更ナコトヲヌカスナ。入ルゾ」

無理やりS級にねじ込めるだけの力がある時点で察しろと苛立つものの、蒸気を噴き出しながらのそのそ歩くメタルナイトは、招集されたにも関わらず相変わらず微塵も物怖じする様子がないサイタマを頼もしいと感じていた。嚴重にロックされている扉がサイタマとメタルナイトを認識し音を立てて開き、二人は内部へ歩みを進める。会議室に向かって歩く二人を出迎えたのは楊枝を口に加えた男だった。

「おお、メタルナイト。お前がくるとは珍しいな！その隣はサイタマか」

「招集ニコタエルノハ不本意ダガ、コレホドノ危機ニハヤムヲ得ナイ」

「お前がそこまで言うたあ腕が鳴るじゃねえか。期待できそうだ」

ククク、と笑う男をメタルナイトはサイタマに紹介する。

「サイタマ、コイツハS級4位ノアトミック侍ダ」

「オツサンもヒーローなんだな、よろしく」

「おう、よろしくだなサイタマ。お前がアマイマスクを一撃で叩きのめす映像は見させて貰ったぜ。全くイキのいい新人が入ってきたもんだな」

アトミック侍は手を伸ばすサイタマを受け入れ固く握手した。S級4位にはつきり実力を認められているのは間違いないサイタマをサポートしているメタルナイトの影響だろう。サイタマのアマイマ

スクへ踏み込んだ速さ、パンチの攻撃力をアトミック侍は高く評価していた。それに加えてアマイマスク本人がはつきりと実力負けをしたと証言したこともあり、サイタマの実力に懐疑的な者は最早ごく僅かとなっている。

「後一応言っておくが俺はオッサンじゃねえ、まだ37だ」

「アトミック侍って呼ぶの長いしオッサンでよくね？」

「話聞けや、いいわけねえだろ」

「……トットト会議室に入室シロ」

相変わらず緊張感のないやりとりをしながら、三人は室内へと入った。

部屋の中央には幅広い、立体映像を映し出せる机が設置されておりその机を囲むようにして他のS級ヒーロー達が座っていた。サイタマ達も座り、欠席のブラストを除いたS級2位からS級18位までの17名がここに勢揃いした。

ここに居る人物は一人一人が災害レベル鬼の怪人を単独で倒し得る埒外の存在。

サイタマに向けられる複数の視線は好奇心、無関心、僅かな敵意と様々だった。

ほぼ全員が集合したことで扉を開けて、今回S級ヒーロー達が招集された理由を告げる者が現れる。

「皆揃ったようだな。私は今回の説明役を任されたシッチという者だ。大預言者、シババワ様が地球の危機の予言をお告げになられた。予言の内容は明日、海がヤバいというものだ。童帝くん、キミがS級の指揮を取って地球のピンチを救って貰いたい」

「ボクが指揮を取るのはいいけど、明日って急だなあ。それにそれだけじゃ怪人が襲ってくるのかも分からない。単に海が汚染されるとかそういう可能性もあるよ」

シババワの予言は100パーセント当たるが、ごく一部の災害しか予言できない。

今回の場合もはつきりした日時が分かったにも関わらず、具体的な内容までは分からなかった。だがヤバいという予言を聞いてもS級

の面々はあまり危機感がない。皆自分の実力に自信を持っているからだ。

「シババワ様は今まで数多くの大災害を予想してきたが、ヤバいとまで表現したことはただの一度もない！未曾有の危機が海から迫りつつあるのだ！」

「……」

シツチの熱弁が止み、部屋の中に静寂が満ちる。

S級の中で口火を切ったのは、童帝ではなくタツマキだった。

「怪人が出なかった時の危機はアンタ達に任せるわ。そもそも私達の仕事は怪人を倒すことだし。アンタがそれほどまで言うのならもしかしたら災害レベル神を見ることができるかもしれないわね……私に勝てるとは思えないけど」

ピンと指を立てて、シツチに挑発的な視線を向けるタツマキの仕草にはS級2位として自分の実力に絶対の自信がある様子が伺えた。災害レベル神が現れるかもしれないと聞けばヒーロー達もその強さをイメージしやすい。タツマキに触発されるかのようにS級ヒーロー達はそれぞれ思い思いの反応を見せる。

流石先生と感動するジェノス、そんなジェノスと戦いを通じてお近づきになりたいプリズナー。神でもいけるぜえと意気込む金属バット。舎弟達の安否を心配するタンクトップマスター。

俺の速度に反応できるはずがないと思いつつも敵を侮らないフラッシュ。無表情で興味なさそうな番犬マン。強靱な筋肉を見せつけ強敵に喜ぶクロビカリ。我関せずにご飯を食べている豚神。無言の駆動騎士。気を張り詰めたままでもS級の協調性のなさに呆れるゾンビマン。キングエンジンを猛烈に鳴らすキング。静かに目を細めるアトミック侍とシルバーファング。

指揮官を務める童帝はこれはまとめるのは大変そうだと冷や汗をかきながらも大きく声を上げる。

「とりあえず海に近接しているJ市に避難勧告を出そう。現場のA級のヒーロー達には万が一のためこの本部を守ってもらう。そして……」

そこまで策を考えた童帝の作戦立案を遮るように、会議室に必死の形相の人間が現れた。

「報告します。海人族を名乗る怪人がJ市に出現！A級のステインガーを蹴散らし暴れまわっています！」

会議室の机に映し出されたのは、身長2メートル程のタコのような怪人だった。

怪人の名が海人族、海がヤバいとなると今回の事件に関係がある怪人なのではないだろうかと誰もが悟る。

「なんか見るからに雑魚って感じね。明日が本番でしょうけど、早々に片づけてくるわ」

「先生、お供します！」

「いやタツマキちゃん、ジエノスさんここはボクの指示に従ってくれないかな……!?!」

機嫌がいいのだろうか、気合が入ったタツマキが童帝の指示を聞くことなく真っ先に現場に急行しそれを追うように弟子を自負するジエノスも走り出す。

後を追うように立ち上がったのは、メタルナイトとサイタマ。

メタルナイトはサイタマに近づき耳打ちする。

「地底人ト海人族……類似点ハナイガ嫌ナ予感ガスルナ。サイタマ、オマエモ向カエ。タツマキガ危険ニ陥ツタラ助ケロ。俺モデータヲトリニムカウ」

S級メンバーの中で、最も今回の敵を危険視しているのがメタルナイトだった。サイタマの実力を間近で見ても誰よりも知っているメタルナイトはそれと同格の存在の怪人を知らされた結果、S級2位のタツマキが怪人を退治しようとしているにも関わらず欠片も油断することはなかったのである。

「……おう、行ってこようぜ」

サイタマは真剣な表情を浮かべ宙にヒーローマントを翻し、メタルナイトと共にタツマキとジエノスを追いかけることにした。

「待つてよサイタマさん、メタルナイト……行っちゃった」

後に残ったのは、サイタマ達4人を大声で静止したにも関わらず聞

き届けられなかった童帝。

「はあ、ボクが子供だから舐められてるのかな……明日が不安だよ」

「お前がいつも努力しているのは知っている。頼んだぞ指揮官」

がつくりと肩を落とす童帝を、比較的常識人のゾンビマンが慰めるのであった。

タツマキが向かえば安心、本番は明日。

安易にそう思い込んでいたS級の面々は数十分後、驚愕することとなる。

海がヤバいというシババワの予言は、誇張でも何でもなかったのだ。

絶望が、彼らヒーロー達に襲い掛かろうとしていた。

海人族襲来

「我々は深海からの使者、海人族である。人間共よ、地上を明け渡すのだ！」

J市の海に面した一角で、人間のような胴体手足にもかかわらず顔面部分が巨大なタコのようになっている怪人が歩きながら暴論と共に大量の黒い墨を吐く。

墨は大きな波となつてビルや人間を押し流していった。

童帝の指示を待たずとも既にJ市に避難勧告は出されていたものの、全員は間に合わなかった。住民の悲痛な叫び声が飛び交う中、怪人は闊歩する。

現場に駆け付けたA級ヒーロー、イナズマックスは、ビルの屋上から携帯型の望遠鏡で怪人を眺めながらどう動こうかと考えていた。

「敵は一匹だけみたいだがどうするか……応援を待つか、住民の避難誘導を優先するのが賢いかもしれないが」

既に警報が流れ、事態は災害レベル鬼の案件となつている。同じA級でランク上位のステインガーが瞬殺されている以上、自分が戦つても勝算は薄いだらう。イナズマックスが怪人を観察していると、望遠鏡越しに怪人の4つの目玉のうちの1つと目が合った。一瞬バレたかと冷や汗をかいたものの、怪人はイナズマックスを無視して墨をさらに吐き出し、周辺の被害をさらに拡大させていく。

「そうかよ、俺は眼中にすらねえつてことか……！」

「ガボボ……助けて、助けてくれ！」

「……………」

溺れた者の一人が、もがきながら虚空へと手を伸ばす。それは明確なヒーローへの助けを求める声。イナズマックスは逃げようかとも考えたものの、このまま助けを求める人達の悲鳴を無視して逃亡することはできなかつた。

無謀かもしれないが、ヒーローには背を向けてはならない時がある。今がそれだと覚悟を決めた。

「俺だってA級ヒーローだ、やってやろうじゃねーか……！」

ドクドクと心臓を鳴らしながら、イナズマックスは屋上からタコの怪人へと飛び掛かり……何が起こったのかも分からずビルの側面に叩きつけられていた。朦朧としていく意識の中、イナズマックスは血を吐き出しつつ悟る。

「野郎、鬼とかいうレベルじゃねえぞ……こんな奴……倒せるのか……」

怪人が振り向いたその風圧のみで吹き飛ばされ、戦闘にすらなっていない。イナズマックスは救援にくるであろうS級ヒーローの身を案じながら気絶した。

「酷いことになってるわね」

タツマキが数分後にJ市に到着した頃には、市の五分の一程の面積が既に墨によって沈没しきっていた。怪人の災害レベルは鬼から竜へと上がっている。

タツマキは市内上空を超能力で飛翔しながら、これ以上の被害を抑えるために超能力で冠水した墨を海に押し戻していきつつ元凶の怪人を探すことにした。

ドドドと盛大な音を立てながら、物凄い勢いで墨が海へとかえっていく。

「時間ずれてるし、予言とやらもあてにならないじゃないの」

タツマキは自分が超能力者ということもあり、100パーセント予言が実現するシババワの予言を決して信じていないわけではない。だからこそタツマキは僅かにシババワに失望していた。

「とりあえず面倒だからジェノスがくるまでに終わらせましょう、アイツ暑苦しいし」

墨を大方海に戻し終わったタツマキは、上空からようやく元凶のタコ怪人を発見し地面に降り立った。怪人は折角大量に吐いた墨を戻され憤った様子であるが、ヒーローとして怒っているのはこちらも同じことでありタツマキの声色は激しい。

「アンタが元凶みたいね、弱そうだな見た目してるし竜だとは思わなかったわ」

「我々の邪魔をするな！」

「勝手に言ってなさい」

怪人の我々という発言が引つかかったものの、タツマキは手をかざし超能力で怪人の体を捻じりきろうとする。

この時、この瞬間までタツマキは怪人のことを舐めていた。今までタツマキの念動力に対抗できる怪人は存在しなかったのであるのだから当然だ。

これは決して驕りという訳ではない。タツマキが災害レベル竜の存在すら容易く蹴散らせるのはれっきとした事実だからだ。

しかしそれも、相手が災害レベル竜以上であるなら話が別のことである。

「なによこれ、重い！」

タツマキが念動力を高めて捻じ切ろうとしても、向かってくる怪人の歩みを僅かに遅らせることしかできなかった。徐々に威力を上げていき、ついには全力を出したもののタコ足の一本に僅かにヒビが入った程度で有効打とは程遠い。

タツマキは強大な怪人を目前にして、それでもなお不敵な笑みを浮かべた。

「……アンタやるわね。これが災害レベル神の力といったところかしら」

「我々に対抗できるのは3つの種族だけだ。キサマら人間など単なる家畜に過ぎない。特に我々の王、深海王様のお力はキサマの想像を絶するものだ」

「フン、どうかしら」

タツマキは強気の姿勢を崩さないものの、その心中は穏やかなものではない。

どうやら本当にこのタコ怪人は弱い方で、しかもこいつの主が存在するのは事実のようである。これ程の力を持つ怪人が嘘をつきへりくだる必要はない筈だからだ。

「これでも食らいなさいー」

ならばとタツマキは人が残っていない周囲の流されていたビルを複数超能力で持ち上げ、数百の槍に変化させ一斉に怪人に叩きつけて

いく。超能力の効き目が薄いのなら物理攻撃を試すまでのこと。僅かな望みをかけたタツマキの攻撃は苛烈であり。

それ故に、絶望は大きい。

「キサマのそれは攻撃なのか？」

土煙と共に現れた怪人は、傷一つついていなかった。

ここでようやくタツマキは己の攻撃が怪人に全く効いていないことを認めた。

そしてこの怪人が、はるかに自らより格上であることも認めた。

認めた上で、タツマキは怪人を打倒することを決めた。

「ふん、中々やるじゃない。そうね、やっぱり私にはこれが一番合ってるわ！」

タツマキは再び超能力で怪人を捻じ切りにかかる。この超能力で直接蹂躪する攻撃方法こそ、戦慄のタツマキには相応しい。無理をしたことにより、タツマキを激しい頭痛が襲う。今までタツマキの攻撃を受けて、生存できる者は存在しなかったがこの怪人は別だ。ならばタツマキ自身が限界を超えるしかない！

向かってくる怪人の動きが、ほんの一瞬だけだが完全に止まる。

「……キサマ、どうやら今までの雑魚とは少し違うようだな」

タツマキを眼中に入れていなかった怪人の声色が僅かに変化する。タツマキの限界を超えた超能力を身に受け、ここにきて初めて怪人はタツマキを敵になり得ると認めた。

「ならば、キサマが我々の脅威へと成長する前に速攻で倒す！」

怪人は念動力を受けながらもタツマキを倒そうと走りだす。

彼我の距離はかなり縮んでおり、タツマキには空を飛んだりバリアを張る余裕はない。力を僅かでも弱めれば一瞬で懐へと到達されるだろう。単独ならここで、タツマキの命は終わる筈だった。

「先生に触れるな！」

怪人の拳が到達する直前、ジェノスが超能力を発動しているタツマキを抱えこんで走る。ジェノスはぎよつとした。慕っている師匠が猛烈な熱を発していたからである。超能力を発動する際その身に凄まじいエネルギーをため込んでいたのだ。

「ゴホッ……ストーカーもたまには役にたつわね」

「しつかりして下さい、先生！」

「どうやら我々を脅かす脅威はなくなったようだな！」

「くっ……！」

気が抜けたタツマキは息も絶え絶えにしながら、それでもジエノスに嫌味を口にするのを忘れなかった。しかし力を使い果たしたタツマキとこの怪人に対抗するにはあまりにも力不足なジエノス、最早状況は絶体絶命であることは誰の目から見ても明らかだった。

そんな絶体絶命のピンチに、ヒーローは現れるものである。

「ここからは、俺に任せてもらうぜ」

白いマントがばさりと音を立てる。

タツマキは薄れゆく意識の中、本来はC級だったと見下していたS級最下位の拳が怪人に突き刺さり爆発する幻覚が見えた気がした。

部下を10体引き連れた深海王の襲来まで、残り1日。

予言の日

ついに予言の時が来た。

サイタマは童帝から手渡された小型の発信器を持ち、メタルナイトと共に最前線に出ている。サイタマとメタルナイトの視界を覆いつくしているのは、既に壊滅状態のJ市を更に飲み込もうとする巨大な津波。市民の避難は既に完了しており、民衆の被害を気にする必要がないのは幸いだろう。

「これはやべーな」

「波ノ中カラ複数ノ想定以上ナエネルギーヲ観測中ダ。一瞬モ気ヲユルメルナ」

「おう」

真剣な表情で気を引き締めるサイタマへと、発信器から童帝の通信が入る。

「サイタマさん、海から出現する怪人の反応を確認したら連絡するよ。あなたの働きに世界の未来はかかっている」

「自覚はあるぜ。愛人族とやらに負ける気はねえよ」

「……カイジンゾクダ」

キリつとした顔のサイタマだが自分と同格に戦える者の種族名すらまともに覚えるつもりがないどこかとぼけた様子は相変わらずであり、良い具合に力は抜けているようだった。

「サイタマさんが打ち漏らした怪人は後衛のボク達で倒すけど、戦力差を分析するとキングさん以外はS級全員でも一匹を相手にできないかもしれない」

発信器から聞こえてくる童帝の冷静な分析は正しいが、声からはどことなく悔しさが滲んでいる。司令塔として冷静に振舞うべきだと分かっているがやはりS級5位としてのプライドがあるのだろう。

サイタマと機械のメタルナイトのみが前衛なのは、S級であっても怪人との力の差がありすぎるのが明確であり、大勢で挑もうとも被害が増えると判断したための苦渋の決断だった。フラッシュやクロビカリといった実力に自信があるS級は猛反発したもののメタルナイ

ト、童帝、ジエノス、タツマキといった面々が声を上げサイタマとキング以外は戦いにすらならないと説得。

そのキングの一声でサイタマが前衛、キングが後衛となることではついた。

波が轟音と共に無人のJ市を丸ごと飲み込んでいき、水の中から9体の海人族達が現れる。

怪人達はそれぞれタコ、イカ、魚など様々な海の生物たちが巨大化した容姿をしていた。

「タダ複数体出現スルダケデ市全域ヲ壊滅サセルノカ……」

「海がヤバいとかいう予言はマジだったみてーだな」

前日に襲い掛かってきた海人族の肉体は回収し、データは万全なものメタルナイトは改めて地球の危機を感じ取り、サイタマもそれに同意する。

海人族の脅威は最早自然災害そのものだ。1体も逃す訳にはいかないだろう。

「イクゾー」

メタルナイトがイカ怪人に向け無数の特製催涙弾を発射する。これはメタルナイトにしかできない戦法であった。確かに災害レベル竜以上の海人族は、ミサイル等単なる兵器程度では肉体を傷つけることはできないだろう。しかし元が海の生物であるのなら食事を取っているはずであり、体内を刺激すれば効果がある成分は存在するはず。

メタルナイトの予測は当たっていた。効き目は僅かではあったが、立ち止まり軽くくしゃみをするイカ怪人。勿論倒すことはできない、だがその一瞬があれば十分だ。

怪人の頭部をサイタマの拳が襲う。しかし怪人は、全身が軽くひび割れたもののなんとパンチを耐えた。

「固えな……いっ……い」

マジ殴り程ではないがかなり本気で殴ったのだが、サイタマの拳にはビリビリとした感触が残った。どうやら数が少ない分海人族のほうが単体では地底人より強いらしい。昨日と違って怪人の全身が濡

れているのも理由の一つだった。

「連続パンチ」

拳の連打でようやく怪人を一体倒すことができたもののサイタマですら最早普通のパンチでは力不足。これと同格の怪人は残り8体、それに加え深海王もいる。

サイタマはたかぶる感情を抑え切れなかった。

地面が海水でぬかるんでいるため前回のようにマジちゃぶ台返しを使うこともできない。同じ理由でマジ走りも全力で使用できないだろう。

「ピンチだが……だからこそ燃えるぜ。ぜってー負けねえ叩き潰す！」

サイタマは生き生きとした表情で怪人達にマジ走りで飛び掛かり純粹に肉弾戦を仕掛けていった。濡れた海人族達はパワーも凄まじく、その気になれば一撃一撃で地球を割ることができる剛力の持ち主。触手が叩きつけられ、両腕で防御したにも関わらずサイタマの体は軋みをあげ、数百メートル以上空中を舞う。

「まだ、負けるわけにはいかねーぜ！」

『必殺マジシリーズ……マジ急降下』

サイタマは東京タワー程の高度から重力を味方につけ即反撃し、怪人の一体を流星のようなパンチで粉碎した。

「改メテレベルガ違いスギルガ、楽シソウダナサイタマ……」

ナイトの体は戦闘の衝撃波で既に機動部分が壊れてしまっていた。結局、メタルナイトは最初の一体を倒す手助けができただけだったのだ。

「俺ハ蚊帳ノ外ノヨウダガ……俺ニモ誇リガアル」

今はこの戦いに混じることとはできないだろう。

しかし、いつか自慢の科学力でこの戦闘に耐えられる兵器を作ってみせる。

最後の海人族をマジ殴りで葬るサイタマのデータを必死に取りながら、改めてそう決意を固めたメタルナイトに童帝からの通信が入ったのはその時だった。

「メタルナイト、海からのエネルギー反応が一体こっちに向かっている！」

「ナニ!? サイトマ、早く……!!」

メタルナイトは前衛の戦闘データ収集に集中していたため、童帝達に気を配る余裕がなかった。最悪なことにサイトマに渡された通信機は既に衝撃で壊れている。この緊急事態をサイトマに呼び掛けようとするナイトの体が、何者かによって踏み潰され言葉が途切れた。「悪いけど、教えられちゃ困るのよねえ」

メタルナイトを踏み潰したのは、王冠をかぶった半魚人だった。

サイトマは手下から受けた傷で軽くふらつきながら、最後の敵……深海王と向かい合う。

「てめーがボスか」

「私の兵達をよくも殺してくれたわねえ。あなたもお返しにぶつ殺してあげる」

「……マジで強かったぜ、お前の手下。いくぜええ!!」

本体ではないとはいえメタルナイトが完全に破壊された怒りもあるのだろう、珍しく必死の形相のサイトマの拳と深海王の拳がぶつかり合い、衝撃で既に荒廃しているJ市全域の地表が大きく罅割れていった。

その一方、後衛のキング達S級ヒーローにも危機が迫っていた。

たかが下つ端怪人1匹、しかしそのレベルは竜以上である。

残りの脅威は海人族1匹と深海王のみ。ヒーロー達の戦いは最終局面に入ろうとしていた。

S級達の意地

サイタマが戦っている一方、S級ヒーローの大部分は遙か後方で待機していた。

参加していないヒーローはQ市に活動を限定している番犬マン、何を考えているのか不明な駆動騎士にS級の中で比較的戦闘力に不安が残るタンクトップマスターとプリズナー。それに加えてブラストがおらずメタルナイトがサイタマの援護をしているのでここに居るS級は総勢11名である。

「海からの生体反応が1体、サイタマさんの戦場を避けるように迂回してこつちに接近中……！皆、気を引き締めて」

どう考えても怪人一体に対して明らかに過大戦力であるはずなため童帝の注意勧告に、強く気を引き締めたのは怪人の実力を体感しているタツマキとジェノスだった。特に常日頃から実力至上主義で高飛車な態度を取り続けていたタツマキの以前の戦闘の屈辱は相当なものであり、タツマキは強く唇を噛みしめている。

見下していたサイタマが一撃で怪人を粉碎したのだから、なおさらだった。

「先生……」

S級の中にはタツマキの実力を疑問視する者も現れは始めている。ジェノスはプライドを傷つけられたタツマキに対してどう声をかけていいのか分からなかった。サイタマが怪人を倒したのを見ても、命を助けてくれたタツマキを先生と呼び慕うことには変わりない。

心配をしてくるジェノスに、タツマキは振り向くことはなかった。「アンタの言いたいことは大体想像がつくけれど、同情なんて要らないわ。」

私は自分でこの汚名を返上してみせる……！」

タツマキが決意し、程なくして海人族が姿を現した。大きな魚の頭部そのものに無数のヒレがついたような姿形である。恐らく海人族の中でも知能が高い怪人なのだろう。

「作戦通りキングさんを中心に……」

「悪いが先に倒させてもらおうぞ」

童帝の指示を待つことなく怪人に襲い掛かったのは閃光のフラッシュだった。

やや遅れてクロビカリも走り出す。後方で待機し、現れたのが弱そうな怪人一体のみ。S級の中で鬱憤が溜まっているプライドの高い者や実力に自信がある者が独断で動くのも無理もない話だった。

「秘儀、閃光斬……い」

フラッシュに慢心はない。いきなりトップスピードを出して斬りかかり奥義で決着をつけようとする。確かに災害レベル鬼での攻撃を見切れる怪人はいないだろう。

だが必殺を確信したフラッシュを襲ったのは、迎撃する魚の尾びれだった。

完全にフラッシュの速度に反応した魚怪人のヒレに含まれた神経毒で、フラッシュは瞬時に意識を失った。

次に怪人に拳を振り上げたのはクロビカリ。クロビカリは自分自身さえ傷つける方法が分からないというほどの頑強な筋肉を持っている。

こちらもフラッシュと同じく鬼クラスではどうしようもないS級の代表格。

しかし怪人のタツクルで、クロビカリのその鍛えた筋肉は一撃でヒビが入り地面に叩きつけられこちらも意識を失った。

「我々に盾着くからどんなものかと思えば、こんなものか」

魚怪人はフラッシュを投げ捨ててにんまりと大口を開いて笑う。

「……これはちと、厳しいかもしれんの。タツマキの嬢ちゃんが苦戦するのも分かったわい」

「アトミック斬で斬れる確信はねえな」

「連携して皆一斉にかかろう！僕たちが突破されれば世界が終わる！」

警戒を強めるのはシルバーファングとアトミック侍。最速の男と思われているフラッシュを上回るスピード、最も硬い防御力を持つクロビカリを一撃で破壊するパワーをこの怪人が併せ持っていること

が分かったのだから当然だろう。

その一方でタツマキは、だからこそ汚名をそそぐ価値があると闘志をあらわにした。

「借りは返させて貰うわよ……!」

タツマキの念動力が瞬時に怪人をその場に押さえつける。速度に自信があるフラツシユが目にも止まらぬ速さで瞬殺されたのだ、こうでもしないければ怪人を見失って全員倒れるだけだろう。幸いにも前回の戦闘で限界を超えたタツマキの出力は上がっている。動きが止まった隙に怪人の左右からそれぞれシルバーフアングとアトミツク侍が殴打と斬撃を浴びせかけた。

「ぬうー!」

「やつぱり斬れねえな」

流水岩碎拳とアトミツク斬を食らっても軽く鱗が落ちる程度。

だがここまでは想定通りだった。怪人の気を引くことさえできればいい。

S級2位、3位、4位の力を総動員した成果は大きかった。

正面からS級最大の破壊力を持つ豚神が突進し、動きが鈍った怪人を丸のみにしていく。正に必殺の攻撃を怪人はかわすことができなかった。

「やったか……!?!」

戦況を見守る童帝。しかし怪人を飲み込み太った豚神は白目をむく。

「あ、これ無理」

豚神が倒れ、消化されきらずに再び口の中から怪人が出てくる。

だが元々海の生物なこともあってか、怪人は豚神の胃液を浴びたダメージは大きい。

怪人はギョロリとした目で強くタツマキを睨み付けた。

「甘く見ていた……どうやら一番厄介なのは貴様のようだな……!」

「怪人に褒められても嬉しくないわね!」

実際強化されたタツマキが居なければ戦いにならずS級は既に全滅していたはずだ。念動力によって体の自由を再び奪われた怪人は、

タツマキに向けて口を開ける。

「……！先生危ない！」

ジェノスが咄嗟にタツマキを抱えて回避したものの、レーザーのような水鉄砲により背後のゾンビマンの下半身が消し飛ばされ、着弾先のK市全域が凄まじいエネルギーの影響で煙のように瞬時に消え去っていく……。

怪人が水鉄砲を発射した後の状況は悲惨だった。ゾンビマンは暫く再生不能になり、タツマキを庇ったジェノスの体もボロボロ。司令塔の童帝も余波だけで昏倒してしまっている。

怪人は左右のシルバーファングとアトミック侍を無視してタツマキに突進した。

「このガキを倒せば我々の勝ちだ……!?!」

怪人の脇からすつと出てきたのは、地上最強と目されているキング。グ。

キングは高らかにキングエンジンを鳴らし怪人を睨み付けている。その重圧音は今までで一番大きく、戦っているS級全員にまで聞こえるものだった。

「なんだ、貴様は……!?!貴様のような人類が居るのか!?!」

「……これ以上、先に進まない方がいい」

至近距離で睨み合うキングと怪人。怪人はキングのオーラに慄き、迂闊に攻撃すればやられると判断し動けなかった。一方のキングはそもそもなんで自分から怪人の目の前に出てきたのか自分自身分からずキングエンジンを響かせることしかできない。

至近距離で立ち尽くすキングと、警戒して仕掛けない魚怪人。

「あやつらどうして動かないんじゃ」

シルバーファングが二人の様子を眺めていたが、アトミック侍がキングの様子に気付く彼なりに解釈した真実に辿り着く。

「いや、違うぜ。俺にはあいつらが何をしているのか理解できた」

「どういふことじゃ?」

素で疑問を返したシルバーファングにアトミック侍はキングを指さし解説する。

「既に動いてやがる、達人の俺達すら視認できないスピードでの戦いはもう始まっていやがるんだ。キングの手足が細かくブレているのがその証拠だ。あいつは必死にタツマキを倒そうとしている怪人を食い止めているのさ」

「なんじゃと……!?!」

シルバーファンクが改めてキングと怪人をよく見ると、両者は相変わらずその場から動いていないにも関わらずキングの全身は細かく振動している。

そもそも超スピードカメラでサイタマの動きが補足できなかったのだ、実力がかけ離れすぎていればそういうこともあるのだろう。シルバーファンクとアトミック侍は改めてキングの桁外れの実力を感じ取った。

(……え、俺怖くて震えてるだけなんだけど。何という好意的解釈) キングの内心のボヤキには、残念ながら誰も気付かないままである。

しかし時間稼ぎの効果は大きく、タツマキが再び復活するには十分だった。

「流石ねキング……でも後は私に任せて貰おうかしら!」

全力を尽くしてやつと動きを一瞬止めることができたタツマキと違い、キングは汗一つかかずに怪人と互角に渡り合っている。この違いにプライドの高いタツマキですら上には上がいると改めて感じざるを得なかった。

「キングやサイタマに負けていられないわ! アンタの仲間が言ったことなのよ、私がつと強くなればアンタ達にとっては脅威になるつてね!」

「グアツ……!?!」

タツマキが力を込めて捻じ切ろうとすると、胃酸に侵された怪人の全身に僅かにヒビが入る。自分より格上との短時間の戦闘の数々で、タツマキは己の殻をついに破った。

だが怪人は全身を軋ませながらも再び口を開けタツマキに水鉄砲を発射しようとする。

「マズい、発射させてはならん！」

タツマキのピンチに加えて市一つの壊滅の危機。シルバーファングの警告に、間に合うS級は居ないかと思われた。

しかしその怪人を背後から、豚神が再度飲み込む。

今までは考えられない速度。豚神もまた、強力な怪人を僅かに消化したおかげで殻を一つ破ったようだった。S級全員が注視する中豚神の腹は大きく変形していくが、今度は暴れる怪人を豚神は腹の中に押しとどめ続ける。

しばらくして怪人の抵抗はなくなった。

「うん、今度は大丈夫。満腹」

豚神はゴロリと横になると、大きく寝息を立て始めた。

雨雲から雨がポツポツと降り始めている中、ヒーロー達はようやく緊張をとく。

「アンタが尊敬する存在は、まだ強いわよジェノス」

「……はい！」

タツマキは髪をかきあげ気丈な態度を崩さないものの1対1ではまだ勝てないであろう、薄氷の上の勝利であった。タツマキの覚醒、胃酸に弱かった海人族、豚神の覚醒、キングの足止め、戦闘後に降った雨。何か歯車が一つでも狂えばS級はあっさり全滅していたであろう。

こうして災害レベル竜以上の下っ端海人族との戦いは終わりを告げた。

「これではサイタマくん次第かの」

J市を振り返るシルバーファング。そう、人類の危機はまだ過ぎ去っていない。

J市ではサイタマが雨で渴きが満たされた深海王相手に『苦戦』していた。

最強のヒーロー

さかのぼること海人族がS級達に襲い掛かる少し前、メタルナイトが踏み潰された後。

津波と戦闘の余波でボロボロになったJ市で、サイタマと深海王は戦っていた。手が何本もあり無数の剣を持っている地底王と違って、乾いた深海王の姿形は普通の人間に近いものである。身長も大柄の男性程度であり、怪人の中ではそれほど大きいとは言えない。

しかし深海王の剛力と耐久力は、正面からサイタマのマジ殴りと衝突して僅かに深海王が押されるが踏みとどまる程のものだった。それに加えて深海王には再生能力がある分正面からの殴り合いで押しきれない。純粹なパワーのぶつけ合いならサイタマの方が不利だろう。

「……やっぱり強いな、お前。地底王が互角と言うだけのことはあるじゃねーか」

「あらあ、下等な人類ごときが上から目線で生意気な口を利くわね」
攻撃を一時中断して探り合う両者。サイタマのマジ殴りと深海王の拳が幾度もぶつかり合った結果、サイタマの拳からは僅かに血が流れ出ていた。手下達の硬い体を殴り続けたというのも理由の一つである。

「これは、ただ楽しんで戦い続けてる場合じゃねーな」

この事態にワクワクしていたサイタマも意識を切り替えざるを得なかった。サイタマは戦闘狂であるがヒーローとして怪人から人類を守るという趣味は忘れていない。自身と互角に戦える強敵の存在を追い求めていたとはいえ、負ければ地上はこの深海王のものとなるだろうことは明らかだ。

「楽しむ……？私の兵隊さん達を沢山殺しておいてよくそんなことが言えるわね」

「俺も一緒に過ごしてたダチの体が破壊されたんだ、頭にきているのは同じことだぜ」

サイタマにとって、メタルナイトは趣味でヒーローをしていたサイ

タマを誰もが認めるヒーローに押し上げてくれた恩人である。S級になった今ではサイタマが市を歩いているだけで大人からは声援が飛び、子供が手を振ってくれるほどの知名度になっている。

本体のボフォイはいまだに現れず機械の姿のまままで何を考えているのかは分からない。だとしても、サイタマはメタルナイトに恩を感じていた。

もしサイタマがS級でなければ、前線に出ることはなくもっと多くの被害が出ていたはずである。サイタマが間に合ったとしてもS級は全滅していただろう。

「俺は適当な所あるから、きつとあいつのフォローに見えない所でかなり助けられてるはずだ。とても感謝してるんだぜ、本人には言えねーけどな」

「家族を奪われた私にはどうでもいいことねえ」
「侵略してきたテメーらが悪い」

元より分かり合えるとは思っていない。これ以上の舌戦は平行線であると判断した両者は黙って戦闘を再開した。サイタマはマジ走りで深海王の剛腕をかくぐり、脇腹に拳を振りかぶる。攻防で直感したことだがスピードはサイタマの方が上であった。

『必殺マジシリーズ……マジ殴り！』

気合が入った渾身の一撃が深海王の脇腹に突き刺さり、深海王は腹をへこませ盛大に吹き飛んでいく。間違いなく有効打となったであろう一撃、しかしその代償は大きかった。

「熱っち、腕が……」

思わず腕を庇うサイタマ。深海王が体内に忍ばせていたウツボが咄嗟に口から飛び出し酸を吐き、サイタマの右腕に襲い掛かったのだ。これでサイタマは利き腕で全力で殴ることができなくなってしまう。

それに加えて、上空を覆う雲の間からぽつぽつと雨が降り始める。
「きいたわ……少しね」

地上に出て干からびていた深海王は雨によって驚異的な回復能力を手に入れ、渾身のマジ殴りを食らったにも関わらず起き上がった。

筋肉が発達し、エラが体の所々から飛び出た深海王は手を地面につけ、四つん這いの体制となる。ゴクリと唾を飲み込むサイタマは、久しぶりに冷や汗をかくのを止められなかった。

「残念だったわねえ、他の王を含めても今の私に勝てる生命体はどこにもいないわ」

その言葉を言い終わるや否や、突進した深海王の拳はサイタマに突き刺さっていた。

とつさに防御したサイタマの右腕は完全に砕かれる。

「うがつ……」

大きなクレーターを作り、サイタマは仰向けに横たわってしまった。

深海王は倒れたサイタマを手足で囲むように立ち、サイタマを遙かに上回る速度とパワーの拳の連打で幾度も打ち据えいたぶる。正に今の深海王は最強だった。

「弱い！弱いわねえ！今の私には誰もかなわないわ！」

「……！」

全身がボロボロとなり、意識が朦朧とする中殴られ続けるサイタマ。万全の体制ならマジ殴りで雲を払うこともできるだろうが深海王がそれを許さない。一発一発がマジ殴りを超える威力を受け続け絶体絶命のピンチの中、サイタマは根性で意識を保ち続けた。

そんなサイタマを助けるために、ヒーローは立ち上がる。

「あらっ……っ？」

いつの間にか、雨はやんでいた。深海王が上空を見上げると誰かが遠方から放った巨大なレーザーがゆつくりとJ市上空の雲を消し飛ばしていく。これはメタルナイトの仕業だった。弟子である童帝の兵器でさえ雲を貫くことができたのだ、兵力が上回るメタルナイトに同じことができないう理由はなかった。

「援護かしら、小賢しいけれど遅すぎたみたいねえ」

再びしぼんでいく深海王はそれでも余裕な表情を崩さない。

負けかけているサイタマに思わず援護をしたボフォイ博士は生身の体で、遠方からスピーカーの大音量で呼び掛けている。

「お前はオレが認めた最強のヒーローだ……オレの目標だ。そんな奴に負けるな。勝て！勝つてくれ、サイタマ！」

メタルナイトとして、ボフォイとしての必死な肉声はサイタマの感情を強く揺さぶる。瀕死だったサイタマの瞳に再び生気が宿った。サイタマは横たわりながらもゆっくりと、左腕を引く。

「うっとおしいわねえ。次に殺すのはあいつにしましょうか」

「させねーよ……！ボフォイ、お前の言葉、確かに届いたぜ」

仲間からの応援の声。これに答えなければ男ではない！

サイタマは残った全力を全て左腕と拳に込めた。

弓の弦のようになつた勢いをつけた腕が放たれ、全世界を揺るがす破壊力を持った拳が深海王に吸い込まれていく。

「超！マジ、殴り！」

「死にかけの雑魚が……！なによこれえ！」

そのパンチは迎撃した深海王の拳すら突き破り、悲鳴を上げるその頭部に到達し破壊した。衝撃が全て吸収されたのか、それとも奇跡だったのか。サイタマのパンチは周囲にこれ以上の被害をもたらすことはなく。

残ったのは真正面の殴り合いで深海王が敗れたという結果だけ。

そう、ヒーローが怪人に勝ったという事実。それだけで、きつと十分だった。